



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2010/01/15(金)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 64

第24回 北海道中学校バスケットボール新人大会 決戦大会

北海道ジュニアバスケットボール連盟
会長 幸丸政実

年末の南・北大会に引き続き第24回北海道中学校バスケットボール新人大会は南北男女それぞれ代表上位3チームによる決戦大会が1月10日、11日に美唄市で行われました。

南からは男子、厚別北中学校、江別第二中学校、発寒中学校、女子、室蘭向陽中学校、北星女子中学校、大麻中学校が出場、北代表は男子、愛宕中学校、北門中学校、帯広第五中学校、女子、帯広第一中学校、神居東中学校、美唄・美唄南中学校が出場しました。

男女それぞれ2ブロックに分かれ、3チームリーグ戦を行いブロックの上位2チームが翌日の決勝トーナメントに進みました。出場選手の特徴としては、長身選手の不在が挙げられるでしょう。

「大型選手の不在」

プログラムで調べたところ、今大会男子の180オーバーは南で6名、北で2名、女子の170オーバーは南で3名、北で2名でした。そのうち決戦大会には180オーバーが男子6チーム中2名、170オーバーは女子6チーム中1名しか見当たりませんでした。

小型チーム同士の戦いの結果クイックネスの優れたチームが勝利したと言えるでしょう。比較的大型選手を擁するチームはまだ動作が緩慢で機動力のあるチームが上位を占めたといえます。

その中でも特筆されるのは優勝した男子・厚別北中学校です。スターティング5は170を超える選手が一人もいないだけでなく、これとって注目されるタレント選手も存在しませんが、ディフェンスもオフェンスも決して足を止めない頑張りは称賛に値するでしょう。

「クローン・ファイブ」

それぞれのチームにはそのチームを引っ張っていく核となるタレントが存在するのが普通です。タレントのいない厚別北中学校の特徴はディフェンスが終始2-2-1ゾーンプレス、オフェンスは5アウトのモーションオフェンスが主体で、私はこれを「クローン・ファイブ」と名付けています。どの選手も同じプレーをこなし、どこからでもリバウンドに飛び込み、ルーズボールはダイブして食いつく執念はどのチームより優れていました。

「太い1本の矢 v s 束になった細い5本の矢」

厚別北中学校の選手一人一人をみると他チームの優れた選手に比べて体格や能力は見劣りします。しかし「毛利元就の3本の矢の話」ではありませんが、厚別北中学校は一本一本の矢は細くて華奢ですが常に5本が束になって頑張っていました。

比較して恐縮ですが今回得点王になった北門中学校の④三浦選手は私が観たところ今大会随一の能力の持ち主でした。残念ながら彼自身は「一本の太い矢」ですがチームとして矢が5本束になっているようには見えませんでした。太い矢一本で厚別北中学校の束になった5本の矢に立ち向かったため勝つことができなかつたといえます。また、リバウンド王になった愛宕中学校の④佐竹選手も個人としては一本の太い矢でしたがチームの矢が束になった戦い方ができず厚別北中学校に惨敗を喫しました。

その点、女子優勝の神居東中学校は得点王、リバウンド王ともに同一チームから出ていました。少なくとも太い矢が2本あってチームとしてまとまりのある戦いぶりのできたからこそその優勝だったと思います。

厚別北中学校にはジュニア・オールスターの監督がスターティング・ファイブとして欲しくなるような選手は一人もいません。各チームの監督さんは、団体競技はチームの総合力で勝つことができるということを今回の大会で学ばれたことでしょう。

「ジュニア・オールスターは太い矢が5本束になって頑張してほしい」

ジュニア・オールスターには各チームのタレント選手が集められます。それ

どれ一本一本が「太い矢」のはずです。太い矢が5本束になって戦うチームが監督の手腕でできあがれば北海道は常に全国上位レベルを維持できるはずで
す。

今大会で私が見る見る限りそれぞれのチームには目立つ存在の選手がいてチ
ームをけん引していました。しかし対戦するチームは一人や二人のタレント選
手が頑張るチームは戦いやすいと思わなければいけません。中心選手を抑える
とチーム力は半減するからです。誰を抑えていいのかわからないような平均し
た力を持つようなチーム作りが必要です。そのよい例を以下で述べてみます。

「審判とコーチの合同研修会」

大会1日目の夜、審判とコーチのみなさんは疲れている中、ホテルで研修会
を持ちました。講師には東京から日本バスケットボール協会審判部の森本友明
氏を招き、U-16の海外遠征（アジア大会・マレーシア・ジョホールバル）
での戦いぶりを中心にお話しいただきました。

氏の話から私の考えが合致していることを再認識しました。U-16男子に
はジュニア・オールスターで活躍したスーパースター田渡 凌選手（京北高校
1年）がいます。国際試合で田渡君は1Qには大活躍して得点も大量にとつて
いたそうですが、2Qからぴたりと抑えられ、田渡君を当てにしていたチーム
はなかなか勝てなかったそうです。結果15カ国中6位に終わりました。

外国チームは対戦国の要になる選手をスカウティングしてぴたりと抑えてく
るので、一人や二人のタレントで戦うようなチーム作りではだめだと話されて

いました。今後のエンデバーの強化も太い矢を5本集めて、それが束になって戦えるようなチーム作りが必要になってきそうです。

森本氏の講義の後、審判とコーチによる判定の実際と考え方について熱い議論が交わされました。ともすればコーチからのクレームが多く、審判サイドからすれば話し合いは「審判をつるしあげる会」になる傾向を敬遠して、研修会を開くことに二の足を踏まれると思われがちな審判委員会が進んで申し入れを受けて今回の研修会が開かれたことは画期的なことです。北海道の判定が本州のそれと違うなどと言われることのないように、常に全国一区の意識を持った研鑽が必要です。開催に踏み切って下さった皆さんに敬意を表します。

今回の報告は総論として書き下ろしましたので各チームの戦いぶりを知りたい方はジュニア連盟強化委員会の戦評を見ていただきたいと思います。(完)